学びを通じて人々の愉快な人生を演出する

月刊 ＶＩＣ通信 【2026年4月】

編集前記



皆さんこんにちは！
４月ですね。新年度を迎えて忙しいことと存じますが、花見はされましたか？
春は、桜が満開になり、上を見て歩くことが多いのは私だけでしょうか？もちろん片手にビールは必須です。
桜は短い間、精一杯きれいな姿を見せてくれますが、反対に足元に目をやると道ばたには、タンポポが咲いています。
特別目立つわけではありませんが、気がつけばあちこちに咲いていて、「今年も春が来たな」と感じさせてくれます。
タンポポは、人に踏まれても、風に揺られても、しっかりと顔を上げて咲いていて、何だか好きです。アスファルトの隙間からでも芽を出すその姿には、強さを感じます。
そして、花が終わると白い綿毛になり、風に乗ってふわりと空へ浮かんで、自由に飛んでいくタンポポが羨ましくもあります。
忙しい日々の中では、足元の景色に気づかず通り過ぎてしまいがちですが、時には立ち止まり、タンポポを眺める余裕が欲しいですね。

小さな季節の変化が、ささやかな余裕を与えてくれることもあるのではないでしょうか。
この春は、桜だけではなく、足元のタンポポにも少しだけ目を向けて、元気を分けてもらいましょう。

ＶＩＣ通信も皆様に元気な情報をお届けします。

株式会社バリューイノベーション　代表取締役社長　鈴木正志

New へぇ～S



今月は、『AIによる人事評価』の記事をご紹介いたします。これらは、効率化だけでなく、“納得できる評価とは何か”を問い直す取り組みとして興味深く感じました。

～～

AI時代の人事は心理戦

人工知能（AI）を用いた医療関連サービスのスタートアップ、Ubie（ユビー、東京・中央）は4月、220人いる社員の人事評価にAIを導入する。社内チャットや会議、製品開発の進捗といった業務ログ（記録）を自動で集め、AIが各自の実績を抽出して評価案をつくる。不足があれば社員本人が補う。最終的な評価は阿部吉倫代表取締役が決める。報酬にも反映する。管理職らが評価に割く労力が減り、より事業に専念できるだけではない。社員の心に働きかけて前向きにする試みだ。（中略）人間の目が届く範囲には限界がある。AIなら全ての貢献を把握できるとなれば、社員は公正だと納得しやすく、やる気も出る。（中略）このAIは仕事の難易度や成果などを見て評価する。ユビーは判定ロジックを社員に開示し、意見を聞きながら改善する。評価のブラックボックス化を防ぐ。常にAIに見られているという感覚が、社員の萎縮や不自然な振る舞いを招く心配はある。その点でも同社の取り組みは注目だが、産業界が働く人のデータを生かす流れは不可避に思える。
米人事管理ソフトの大手ワークデイ日本法人のトップ、古市力氏が言う。「バイアスがかかり、勘や経験に頼る人間によって自分の処遇が決まる。そういう会社を若い世代は嫌がる」 企業は社員の成績やスキル、経歴などに関する膨大なデータを人材の配置や登用、組織設計に使うようになる。（中略）
ただ、AIは強力で、働き手が受ける影響は絶大だ。心にも作用するAIを有効に利用したいなら、社員の心情に敏感な経営をすることが大前提になる。

抜粋：日経新聞朝刊（3/24）6面　DeepInsight「AI時代の人事は心理戦」

～～

人の主観や印象による人事評価から、データに基づいた説明可能な評価へと変わっていくことは、働く人にとって一定の納得感を得られると思います。しかし、一方で業務のログが常に評価につながる環境は、人が無意識のうちに萎縮してしまったり、評価されやすい行動に寄せたりすることも起こりそうだと感じました。
また、データに現れやすい仕事だけではなく、日常のコミュニケーションや人材育成、リーダーシップの発揮などといった人の側面のプロセスは、評価者である管理職が見ることが今後より重要になると感じました。
AIを活用しながらも、人が前向きに働ける環境をどうつくるかが、これからの組織に問われているのだと思います。　（秋山）

けんげんいじょう（研修の現場からのいい情報）

管理者向けの研修を実施しました！

今月は、鉄道業で実施した、管理者向けの研修をご紹介いたします。
本研修は、自分たちが職場を作っていく（変化させていく）ために、どのようなマネジメントを実践すべきかを考える全3日間の研修です。

1日目は、経営方針や経営の重要なキーワードを掘り下げてもらいました。
経営方針や経営者が発信しているキーワードを職場メンバーに伝えていくことが管理者には期待されています。そのためには、まず自分自身が、正しく理解し、自分の言葉で咀嚼することが必要となります。議論の中では「自分の考えが皆と同じで安心した」「なるほど、そういう捉え方をするのですね」などの感想が挙がっていました。

2日目は、管理者の役割、自職場の現状やありたい姿の明確化、リーダーシップの本質という3つのセッションで実施しました。1日中熱い議論を交わしていましたが、特に、最後のリーダーシップの本質を考えるセッションは盛り上がっていました。
本セッションでは、自分たちの経験を振り返りながら“自分たちのリーダーシップ指針”を考えてもらいました。
「いつも感謝からスタートする！」「まず自らが手本を示す！」「約束したことは守る！守れない約束はしない！」など自分たちの言葉をしっかりと表現することができていました。

3日目は、自己キャリアをテーマに自分自身と向き合いながら、マネジメントの実践力を高めるために自己課題（第一歩）を明確にしてもらいました。

3日間を通じて、他の管理者と交流を深めながら、より良い職場を作っていくためにはどうすればよいか、自分には何ができるかを真剣かつ楽しみながら議論をしていました。研修が進むに連れて、意識が変わり、具体的な行動に落とし込もうとする意欲が見て取れました。

受講者の皆さんがより良い職場を作れることを祈っております。　（大越）

クイズ「お言葉ですが」

「馬が合う」の語源

「彼とは馬が合う」「なんとなく馬が合わない」など、人との相性の良し悪しを表す「馬が合う」という言葉があります。日常的によく使われる表現ですが、なぜ「馬」なのでしょうか。

この言葉の由来は、かつての人々の生活と深く関わっています。馬は、武士や旅人にとって重要な移動手段であり、その扱いやすさは大きなポイントでした。複数人で移動する際、それぞれが乗る馬の歩調や性格が合っていないと、隊列が乱れたり、移動に支障が出たりします。逆に、馬同士の歩調や気性がよく合っていると、自然と全体の動きも揃い、スムーズに進むことができました。

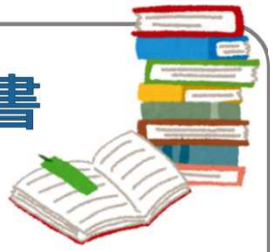
このように、「馬が合う」とは本来、「馬同士の調子や歩調がぴったり合うこと」を指していました。
そこから転じて、人と人との気が合うこと、相性が良いことを意味するようになったといわれています。

「馬が合う」という何気ない言葉にも、人と動物が密接に関わっていた時代の感覚が反映されており、日本語の背景にある、昔の生活の名残を感じることができます。

（金子）



今月の読書



『演技と演出のレッスン』

著者：鴻上尚史
発行：2011年12月20日初版

本書の著者は、第一回M-1グランプリ審査員や、週刊SPA！のコラムなどで著名な演出家の鴻上尚史氏です。本書は、スタニフラフスキーシステムという、演劇を学んでいる者であれば誰でも知っている、ロシアの演出家が提唱した演技メソッドを軸に書かれたものです。鴻上氏は本書について、「俳優とは、作者の言葉を観客や視聴者につたえるしごとであり、そのためには「つたえるテクニック」がぜったいに必要です。では、どうすればそのテクニックを身につけることができるのか、この本には、だれにでもわかるように書かれています。」と述べています。このコメントからもわかるように、本書は、俳優にとっての演技テクニックだけではなく、コミュニケーション場面では誰にでも必要な、役に立つスキルが多く紹介されています。実際に鴻上氏は、企業や教育現場で、本書の技術を基礎にしたコミュニケーション研修を多く行っています。

例えば、営業場面でのプレゼンや、大人数を前にした説明、プライベートであれば結婚式の友人のスピーチなど、聞き手の人数が少ないものから多いものまで、他人の前で話をする機会が誰にでもあると思います。そういった時に、全く緊張しないという方は少ないのではないでしょうか？また緊張以外にも、「あ、あの人寝てる」「あの役員が険しい顔をしているな…」「うまく喋れているかな」など、色々な考えが頭に浮かんできて、話がうまくできなかったり、度々噛んでしまったり、集中できなかったり、という失敗をしてしまったことはありませんか？

> 俳優は多くの観客やスタッフに見つめられる前で演技をします。それは喜びであり、同時に苦痛です。苦しいのは、見られることで俳優を苦しめる「自意識」が生まれるからです。（中略）自意識はささやきます。「ほら、演出家が顔をしかめたぞ。このままじゃダメなんだよ。ほら、友達が見てるぜ。つまんなそうな顔をしてるぜ。（中略）」自意識はあなたが前に進もうとする時、あなたの前に立って、あなたの前進を阻みます。（中略）自意識を失くすことはできません。ただ、自意識の力を弱め、コントロールし、味方にすることは可能です。
> （前略）「集中の輪」は、あなたが自意識から自由になるための一つ目の方法です。（中略）スタニフラフスキーは、人間の集中の状態を、三つの輪に分けました。
> **①第一の輪　または　くつろげる集中の輪**
> まるで、小さなスポットライトの中心にいて、（中略）あなたは、たった一人でいるように感じます。（中略）あなたは日常でも無意識に、一番小さい集中の輪にいることがあります。とても面白い本を夢中で読んでいる時や、（中略）大好きな人のことを思い出している時には、（中略）周りに人がいたとしても、（中略）自分自身が考えていることや、身近な対象に集中しています。（中略）
> **②第二の輪　または　中くらいの輪**
> 光がもうひとつ広がって、直径一、二メートルの輪が、あなたを包んでいる状態です。より視界が広くなり、いろんなものを意識するようになります。（中略）
> **③第三の輪　または最大の輪**
> 目に見える範囲すべてを輪とします。観客を含むと考えた方がいいでしょう。

本書では、自意識のせいで集中できなくなった時には、一旦聴衆のことは忘れ、第一の輪に集中することで、落ち着きを取り戻し、体勢を立て直すことができると言っています。そして、体勢を立て直せたら、そこから徐々に輪を広げていき、第二の輪で誰か一人に集中し、第三の輪で聴衆に集中する、という風に輪を移動していくことで、自分の集中状態を自由にコントロールすることができると書かれています。

また、集中の輪とコミュニケーションを組み合わせて考えると、第一の輪で言葉を発するのが**“独り言”**、第二の輪では**“少人数の対話”**、第三の輪では**“プレゼンやスピーチ”**となります。コミュニケーションがうまくいかないという場合は、この輪にズレが生じているのではないかと思います。

例えば、「遅刻はだめだよ」と相手に面と向かって伝えるべきことを（第二の輪）、直接言いにくいからと言って、「チッ…遅刻しやがって・・・」などと、わざと聞こえるように独り言として言ってしまうと（第一の輪）、相手は嫌味に感じて、改善する気もなくなるのではないでしょうか。

また、プレゼンやスピーチの場面でも、大人数に伝わるように、会場の全体に目を配りながら、大きな声で喋るべき場面で（第三の輪）、下を向いてぼそぼそと小さな声で独り言のように喋ってしまうと（第一の輪）、同じ内容を話していたとしても、意図が伝わりにくいのではないでしょうか。

講師として登壇する際を始め、あらゆるコミュニケーション場面でこの輪をうまく使い分けられるといいですね。（金子）

食べてmeal？ 飲んでみ～る？

春に食べたい和菓子「いちご大福」

和菓子には季節を感じられるものがたくさんありますが、春に食べたくなる和菓子というと、「いちご大福」を思い浮かべます。
「いちご大福」の発祥は諸説あり、元祖といわれるお店も複数あるそうです。その登場は比較的新しく、昭和50～60年代頃といわれています。
昭和60年に『元祖いちご豆大福』を発売した、「和菓子処 大角玉屋」では、和菓子離れの若い人たちにも手に取ってもらえるように、当時人気のあったいちごのショートケーキをヒントに、「生のいちご」と組み合わせたらどうだろう？という発想で生まれました。生のいちごはその日に食べなければならないため、もともと当日中が消費期限であった大福との組み合わせが生まれます。甘酸っぱいいちごとあんこの組み合わせが評判となり、全国にも広がっていきました。
昨今、いちご以外にもいろいろと生の果物と和菓子の組み合わせがありますが、やはりいちごが大定番なのではないでしょうか。

私が個人的におすすめしたいお店は、東京メトロ有楽町線護国寺駅にある「甲月堂」さんです。
こちらは、創業が明治20年の老舗和菓子店で、護国寺から徒歩１分ほどの場所にあります。
どの季節の和菓子も美味しいのですが、1月～4月限定の「いちご大福」が特に人気です。大福は小ぶりながら、頬張るといちごがとてもジューシーで、初めて食べた時は「生のいちごでこんなに甘いんだ。あんことも絶妙に合っていて、想像以上に美味しい！」と驚きました。
先日久しぶりに、「いちご大福」を買いに行ってみました。
「いちご大福」のほかにも、「うぐいす餅」や「草餅」、「道明寺（桜餅）」などもおすすめです。この時期に護国寺に行く機会がありましたら、ぜひ甲月堂さんへも足をのばしてみてはいかがでしょうか？ （夘沢）







値段は1つ280円
（2026年3月時）

～まとめ～

先日、石神井公園に行きました。石神井池にボートがたくさん並んでいるのを見て、「スワンボートっていつからあるんだろう？」と気になり、調べてみました。

スワンボートは1978年に、群馬県明和町のボート製造会社「株式会社スナガ」（以下、スナガ）で誕生しました。
スナガの前身は1887年創業の「砂賀造船所」で、木製の「和船」を製造していました。1935年からは手漕ぎボートの製造販売を行い、1960年代のレジャーブームでは、免許なしで乗れる小型のエンジン付きボートで業績を伸ばしていたそうです。
しかし、全国各地でボート事故が多発し、1947年の法改正でエンジン付きボートに免許が必要となり、業績が悪化しました。そこで、当時のサイクリング人気に着目し、1975年に足漕ぎボートを考案しましたが、売れませんでした。



その後、会社近くの多々良沼で泳いでいた白鳥にヒントを得て、スワンボートの第1号を完成させます。こちらも当初はあまり人気が出ませんでした。それでもデザインの改良を重ねることで話題となり、新聞やテレビで取り上げられ、全国から注文が殺到する大人気となりました。
全盛期には、年間約600隻を製造していたそうです。当時は国内で10社以上がスワンボートを製造していましたが、現在も製造を続けているのはスナガのみだそうです。

スワンボートは子供の頃に乗ったきりですが、暖かくなって水辺で過ごすのが気持ちの良い季節になってきました。私も久しぶりに童心にかえって、スワンボートに乗ってみようかと思います。 （夘沢）